

山本英男先生の人と業績

篠塚 慎吾
上山 俊幸

「山本英男先生の人と業績—篠塚慎吾」

山本英男先生は、昭和59年4月に本学に就任され、平成16年3月に定年退官され、現在は本学非常勤講師として、学生の教育にあたっておられる。この20年の間、先生は研究・教育さらには学内教育行政の面で多大の功績をあげられた。

先生の功績の中で第一にあげるべきは、コンピュータ教育環境の整備であろう。とりわけ、平成元年度におけるメインフレームの導入と平成7年度におけるインターネット環境の導入は、特筆に値しよう。どちらの場合にも、先生は、中心になって関係各位との折衝等にあたられた。おそらく、先生なしには、あのような形でのスムーズな導入は難しかったと考えられる。さらに、学科長制度が導入された際には、初代経済学科長として、学科制の下での経済学科の運営に努力された。また、人事委員長として、旧人事委員会関連の規則の改訂にも尽力された。この他にも、旧コンピュータ室委員をはじめ各種の委員を歴任され、平成13年度以降は、定年退職まで情報基盤会議の委員として、本学のコンピュータ環境の改善に寄与されておられた。

他方、学生に対する教育面では、情報処理・応用情報処理・プログラミング・数理統計等の科目を担当され、数学アレルギーの学生が多い中、FORTRAN・C言語・SAS等を利用したデータの数的処理を精力的に教えられていた。近年は、Excelも利用されていたようであるが、授業内容は様々なデータを学生自身にプログラムを作成させて処理させるという方法を主とされていた。先生の作成されたプログラムを見せていただいたことがあるが、丁寧なコメント付きのもので、それらを読めば自分が何をやっているかわかるようになっていた。しかし、本学の学生は、

あまりコメント部分を読んでくれないとこぼされていた。数学アレルギーと手順を考える習慣に乏しい本学学生にプログラムを教える際の苦労は大変であったろうと推察される。

また、先生は、長く民間企業に籍をおかれていたこともあり、学生の就職には随分と気にかけておられた。特に、最近乱れの日立つ礼儀作法については、厳しい態度で接しておられたようである。先生の授業をとった私のゼミの学生の中には、先生のそうした指導に感謝していた学生がすくなくなかった。

(本来であれば、これに学問上の業績に関する記述を加えるべきであろうが、私には、専門外であるので、控えさせていただく)

「山本英男先生と私—上山俊幸」

定年退官された山本英男先生は、本学では経済学と情報の二つのエリアに属され、情報エリアでは情報教育をどのようにしていくべきかを一緒に検討され、発展させることに寄与されてこられた。加藤学長が就任されたあと、情報教育の必修化が実現したが、これにも尽力された。

情報教育においては、どうしても情報環境が必要になる。現在、千葉商科大学のコンピュータとネットワークは、学生にとって良い環境となり、空気のような存在となっている。先生は、この領域でも大いに貢献された。いまでは、教育界でほとんど見かけなくなったが、教育用コンピュータといえ、汎用コンピュータが主流であったころ、本学でコンピュータの導入時あるいはリプレース時には、その都度コンピュータ導入検討委員会が作られたのであるが、先生はその委員をしてこられた。私も先生と同様、この委員会のメンバーとして、ハードウェアとソフトウェアの導入に関する検討を行い、導入案を作成してきた。いつも論理的に議論されることはもちろんだが、非常にコストにこだわる先生である。そのあたりは後で述べるように、私も先生と同じコストに厳しい企業である日立の出身であったため、考えおられることがよく理解できた。

山本英男先生は、学生のとき数学科で学ばれ、統計学と品質管理の分野で産業界と学会において著名である朝香鐵一先生に一時期師事されていた。朝香先生は、何人かいる私の恩師の一人で、大変お世話になり、また尊敬している先生である。こ

のような関係から、山本英男先生は私の兄弟子ということが出来る。そのことを知ったのは、私が千葉商科大学に奉職してしばらくたってからのことである。確か、本学のコンピュータ関連教職員の宴席で、私が山本先生の隣の席に座る機会に恵まれ、自分の経歴をお話ししたときのことであったと記憶している。

先生は、大学卒業後、大学院に進まれた。大学院修士課程修了後は、ベアリングで有名な日本精工株式会社に就職され、この会社に在籍のまま博士課程で学ばれた。その後、日本精工株式会社から株式会社日立製作所に、ヘッドハンティングされたわけであるが、日立製作所では統計解析関連ソフトウェアを受注開発する部門の長をされ、部下にも統計学の手ほどきをされていた。つまり、企業においても、統計学と統計解析の実力を十二分に発揮されていたわけである。そして、日立製作所から本学に移られたのであるが、先生の経歴を辿ると、先生は大学時代から大学院、さらには就職後もずっと統計学とその応用の領域をライフワークにされて来られたことが分かる。このことは、統計学の基礎的研究から応用研究まで含まれる研究業績を見ると良く理解できる。ここにも、頑なな先生の一面を見いだすことができる。

一方、私はというと大学卒業後、先述の朝香先生に師事して学んでいた統計学や品質管理の分野から出て、統計学を生かして計量経済学とその応用としての経済モデル構築に関する研究の道を歩むのであるが、考えるところがあり途中で学究の道から離れ、日立電線株式会社という日立製作所の子会社に就職し、システムエンジニアとなる。その後、転職して経営コンサルタントとして、企業に戦略策定や管理会計などの指導をすることになる。そして、さらにもう一度方向転換して大学の情報系の教員となり、山本先生にお会いしたわけである。私のこのようなランダムウォークにも似た道程とは異なり、山本英男先生は、直線的に統計学の領域に関わってこられた。それにしても、山本先生と私は、就職した企業も「日立つながり」ということになり、この点でもなにか不思議な縁を感じざるを得ない。

先生は、先ほど述べたようにヘッドハンティングされて、つまりどうしても欲しいという相手があって企業を移られたわけだが、私は先生とは違い、すべて自己都合で転職している。そのような私でも、退職願いを提出するたびに慰留され、時には2ヶ月間も悶着が続いて、精神的に相当疲れた経験があり、山本先生がヘッドハンティングされた時の困難な状況は推察するにあまりある。しかしながら、そのよ

うに思うのは私だけで、実際はそうではなかったのかもしれない。精神的にタフで、人生のイベントをゲームとして客体化することに長けた先生であるから、企業を移籍するときも、ゲーム感覚で乗り切られたのかもしれない。あるいは、それさえも楽しむ対象とされていたのではないかと、邪推してしまう。

現在でも、先生は日立製作所に勤務されていたときの同僚や部下の方と時々会われていて、私も連れて行っていただくことがある。日立カラーとはよく言ったもので、言動にはなんとなく共通した特徴があるように思う。現在日立製作所の重役であり、かつて部下だった方が設定された先生の本学退職の祝宴があったそうである。ここにも先生の人脈の広がりを感じる。誰に対しても好奇心旺盛な眼差しを向け、人を話に引き込む先生ならではのことなのかもしれない。

それにしても先生の好奇心は半端ではない。新しい情報機器が発売されたり新しい技術が発表されたりすると、だいたい先生に先を越されてしまう。新しいものが出ると、とにかくすぐにそれを入手し、操作してみて評価をするのがお好きなのである。その製品なり技術なりを、厳しい評価基準を持って使い込み、長所と短所を明確にされることが楽しみのお見受けした。そうしたことで、私も情報を教えていただくことが多い。

先生との不思議なつながりはまだある。詳しいことは省略するが、先生と私の父とは、以前に仕事の関係があったようである。この他にも、先生のご自宅と私の実家とが非常に近いということも分かった。いろいろな接点のある山本先生と数多くある大学のなかで、この千葉商科大学においてお会いできたということは、どうしても単なる偶然とは思えない。

このような先生との不思議な関係とは裏腹に、ひとつだけ残念であり、また腑に落ちないことは、先生と私は13年間という長い共通する期間をこの大学で過ごしたわけであるが、試験監督で一緒したのが1回だけであったということである。「リンク」するチャンスは、うまくバランスが取れているということなのかも知れない。

いまでは、奥様とご一緒にお食事にお誘いくださるなど、家族でお付き合いをさせていただいている。山本先生と奥様と一緒のところを拝見していると、「この先生にしてこの奥様あり、この奥様にしてこの先生あり」、と敬服してしまう。

先生のますますのご健勝と，ライフワークである統計学研究のさらなる進展をお祈りする。